

# 去来付句「歌の奥義を知らず候」考

——西行説話との関連——

大 坪 利 絹

(一)

標題付句に就いて『去来抄』に記事のあることは周知であろう。芭蕉の「草庵に暫く居ては打やぶり」という前句に対し、去来が「和歌の奥義……」と付けたのを、芭蕉が「前を西行能因の境界と見たるはよし。されど直に西行と付むは手づゝならん。ただ面影にて付べし」として、「命嬉しき撰集の沙汰」と訂したという記事である。もつとも「知らず候」という句文に就いては、幸田露伴は『猿蓑抄』で「去来の原句（大坪注、「和歌の奥義……」句ノコト）の幼き、芭蕉の加筆の味ある、相距る三十里のみならず、又これを悪本の去来抄に、初は、和歌の奥義は知らず候と附けたり、に作る。知らず候にては意味も何も無く、芭蕉の語も通ぜず、所謂俳諧師者流は去来抄をさへ読み得ぬことをあらはしたり、悲しむべし。而も亦知らず候につきて論義を逞しくす、愈々悲むべし。云々」として「和歌の奥義を知らず西行」の句文を良しとしているし、この露伴説を受けて木島俊太郎氏『評註去来抄』（昭和一八年二月）も「一写本にある八和歌の奥義を知らず西行の方が正しい。これは（大坪注、「知らず候」ヨサス）後人の誤写であらう」として以下露伴説と同趣旨を繰返している。

併し、この木島氏よりやや早く出版された三省堂『芭蕉講座・第六卷』で、能勢朝次氏が「尚この去来の句を八和歌の奥義は知らず西行 $\vee$ であると強調して居られる説（大坪注、露伴説ヲ暗ニ指シテイルノデアロウ）もあるが、それは明らかに八直に西行と付んは $\vee$ とあることからの誤解であらう。如何に去来が拙いと言っても全く句の体をなさない八知らず西行 $\vee$ などは作る筈はない」と「知らず西行」を否定されたのを受けて、最新刊の落柿舎藏板『去来先生全集』（尾形仍・大内初夫両氏担当、「俳論篇」中『去来抄』）では、この一写本の「知らず西行」は黙殺されて去来自筆草稿に最も近いとされる国会図書館蔵の写本が採用されてあるが、それには「和歌の奥義を知らずと付たり」となっていて肝腎の「候」は脱落した形である。その脱落を補うために、贅川他石蔵本・賞奇楼叢書『落柿舎遺稿』本・早稲田大学蔵『落柿舎去来遺稿』・板本去来抄の四本の句文「奥義はしらす候」を提出してあるから、現時点では、露伴のいう「悪本の去来抄」の系統本文の「和歌の奥義を（モシクハ、奥義は）知らず候」という句文が最も信頼すべき句文ということになるのであろう。

そしてなお、岡本明氏『去来抄評釈』や前記能勢氏三省堂『芭蕉講座・第六卷』「俳論篇」では「三册子には八和歌の奥義は知らず候 $\vee$ となつてゐる」とあるのであるが、『三册子』の何系統本の何処の個所にそんな句文があるのか私には調べがつかないのである。以上要するに、去来の自筆そのものが「知らず候」であったのか「知らず西行」であったのか、私の力では今は判断できないことを告白しておく。

とにかく以上の如くで、去来は最初「和歌の奥義を（モシクハ、奥義は）知らず〔候〕」と付けたのであるが、それを芭蕉は「命嬉しき撰集の沙汰」と「直し給」うたのである。

何故芭蕉が斯く直したのか、その理由は、『去来抄』では「むかしは多く其事を直に付た」のだが「それを俤にて付る」方がよいからだの説明し、「和歌の奥義……」よりも「命嬉しき……」の方が「いかさま西行能因の面影」がよく出て「直に西行」と付けるよりも、露骨性が抑制されて芸術的香気が高まるからだと言くのである。

(二)

ここで少しく観点を換えて「和歌の奥義を知らず候」という付句に対する従来の説明を若干ながめてみよう。傍線は後述の都合上私に付した。引用は必要部分のみ。

(A)月鏡社何丸『七部集大鏡』文政十年

古註に曰、初には和歌の奥義は知らず候と附たれば、先師曰、前を西行能因などの境界に見たるはよし、されど直に西行と附むは手筒ならむ。只佛にて附べしとて、かく直し給ひぬ云々。……愚考成ほと鎌倉の佛はあまりに比興にこそ見ゆれ。さて西行か能因かとはいぶかし、去来が自分の句なるを時の人の佛と聞え候とはいかに、鴨立沢の歌に付て、吾妻より帰京の思ひ立ありしもさる事ながら、同じくはたしかに書のうへにあらはれたる方なるべくや。……

(B)曲齋『七部集婆心録』萬延元年

……【去来抄】はじめは「和歌の奥義はしらず候と付たり△又西行ト顕シテ付クベキヤト伺ヒケルニ▽先師曰く、前を西行能因などの境界と見たるはよし。直に西行と付むは手筒ならむ。只佛にてつくべしと、かく直し給ひぬ。いか様西行か能因の佛ならむと云へり△辯じて曰く「和歌の奥義はしらず候と付し心は、一所不住にしてよき師にあはぬ故に、奥義はしらずと奥義尋ねし人へ断りいふ様の付也。夫も起情の付なれど、今庵を破り出づる体の方よからむと、翁は竿頭に一步を進めて、命嬉しと云ふ妙言もて三条の橋の佛を付られたり。全く先案を手筒と申されし事にはあらず。後年去来抄彫刻の砌り△又西行云々▽の文を脱しける故に、聞過つ人あらむと爰に断る。……

## (C) 能勢朝次『芭蕉講座・第六卷・俳論篇』昭和一八年二月

去来がこの句を創作した時の事情を物語るのである。去来の初案は「和歌の奥義は知らず候(板本『三冊子』には、知らず候とある)であった。これは『東鑑』や『西行物語』などにも見える西行の有名な逸話で、西行が鎌倉に行脚中、頼朝に謁した際、和歌の秘奥を尋ねられた時に、「和歌の奥義は知らず候」と答へたといふ故事によつたものである。……故事を故事として附ける場合には、その表現に含蓄がなく露はであるばかりでなく、若し其の故事を知らないものである時には、鑑賞者は全くその句を理解する事は出来なくなる。例へば「和歌の奥義は知らず候」といふ去来の初案のままであれば、頼朝と西行との物語の故事を知らぬ者には、此句は不可解な句とならざるを得ない。それで俤で附けるといふ事は、故事をはなれてその風情で附けるのであるから、よし故事を知らないものに於ても附句の味はひは味はひ得られるのである。俤はかうした点で蕉風附合を豊かならしめたものである。……

## (D) 岡本明『去来抄評釈』昭和二〇年二月

……西行が東下の際、頼朝と一夜語り、和歌の奥義を聞かれたのに対し、知らずと言って教示を肯じなかつたといふ故事を附けたのである。……

## (E) 樋口功『芭蕉講座・第五卷・連句篇下』昭和二六年一〇月

……『去来抄』に、この句はじめは「和歌の奥義は知らず候」(西行が頼朝の前で言った語にもとづいたのであらう)と附けたのを、芭蕉が「前を西行能因……ただ面影にて附くべし」といって、かう直したのだとある。……

## (F) 岩田九郎『去来抄評解』昭和二六年一二月

和歌の奥義を頼朝にきかれた西行が、「知らず候」と答えた故事を、そのまゝ付けたのである。頼朝から銀の猫をもらって、門前の子供に与えて去った事と共に、西行の名高い逸話である。

(G)井本農一『連歌論集・俳論集』昭和三十六年二月

西行が頼朝に和歌の奥義を問われた答。

『吾妻鑑』文治二年八月の条に左記のような記事があるとするのが典拠で、爾来諸書に引かれている話である。

十五日己丑。二品(頼朝のこと)御参詣鶴岡宮。而老僧一人徘徊鳥居辺。恠之以景季令聞名字給之処、佐藤兵衛尉憲清法師也。今号西行云々。仍奉幣以後、心静遂調見、可談和歌事之由被仰遣。西行令申承之由、廻宮寺、奉法施。二品為召召彼人、早速還御、則招引宮中、及御芳談。此間、就歌道並引馬事、条々有被尋仰事。西行申云、弓馬事者……(中略)……皆忘却了。詠歌者、对花月動感之折節、僅作卅一字許也。全不知奥旨。然者是彼無所欲報申云々。(下略)

(H)宮本三郎『校本芭蕉全集・第七卷・俳論篇』昭和四一年七月

西行が鎌倉で頼朝に謁見、頼朝に和歌の奥旨を問われて、かく答えたという。『吾妻鑑』文治二年八月の条に見えて有名な政事。

(I)安東次男『芭蕉七部集評釈』昭和癸丑(四八年)晩夏

……『吾妻鑑』文治二年八月十五日の条には、鶴岡宮参詣の頼朝が、たまたま詣り合せた西行を引見して、その夜、幕舎に招いて和歌の極意などを尋ねたことを記録している。老西行は「对花月……全不知奥旨」と答えている。このことばは、巷間に流布されているばかりでなく、史書の記録が伝えるものであるから、芭蕉は直付ジカヅケと見たので

あろう。……

(J) 栗山理一 『連歌論集・能榮論集・俳論集』昭和四八年七月

『吾妻鑑』文治二年八月の条に、西行が鎌倉で頼朝に謁見した折、和歌の奥旨を問われて、「全く奥旨ヲ知ラズ」と答えた記事が見える。

(K) 暉峻康隆・中村俊定 『連歌俳諧集』昭和四九年六月

……この付句について『去来抄』（『去来文』にも）に、初め去来が「和歌の奥儀を知らず候」と付けたが、それでは西行が鎌倉で頼朝に謁見の際、和歌の奥儀を問われて「全く奥旨ヲ知ラズ」と答えたという故事へ吾妻鑑、文治二年八月十五日条Vそのまま、前句を西行能因などの境涯とみたのはよいが、直接西行のこととして付けるのは不手際であり、併でそれとなく付けるべきだ、と芭蕉が注意したと伝える。……

(L) 南信一 『総釈去来の俳論・下・去来抄』昭和五〇年五月

西行が東下の際、鎌倉で頼朝と一夜を語り、頼朝から和歌の奥儀を問われて、「知らず候」と答えた有名な話。『吾妻鑑』文治二年八月十五日の条に、「詠歌者……全不知奥旨……欲報申」と答えたとある。

(M) 伊藤正雄 『俳諧七部集芭蕉連句全解』昭和五一年四月

……けれど西行が晩年鎌倉に赴き、頼朝に招かれて和歌の極意を尋ねられた時、「詠歌者……全不知奥旨」と答へた事が『吾妻鑑』（文治二年八月十五日条）に見える。そこで芭蕉は、さうした故事通り付けるのを戒めたものと思

はれる。その上「和歌の奥義は知らず候」ではあまり人もなげな広言に聞えて、前々句からの奇僻な人柄の反覆にもならう。芭蕉による修正が格段の効果をあげたことは疑ひない。……

(N)阿部正美『芭蕉連句抄・第八篇』昭和五八年一月

……初案の「和歌の奥義をしらす」云々といふ句は、鶴岡八幡宮に参詣した頼朝がたまく参り合はせた西行を引見し、一夜幕舎で語り合つた時、和歌の奥儀を頼朝が問うたのに対して、西行は「対花月……全不知奥旨」(『吾妻鏡』文治二年八月十五日条)とのみ答へたといふ故事をそのままに用ゐたのであって、これでは人物が西行に限られ、手際の良い付け方とはいへない。そこで芭蕉が手直しして、全く別の句に仕立て替へたのであった。……真蹟草稿でも既に『猿蓑』所載の句形と同じであるから、去来の「和歌の奥義をしらす」といふ句案は、極く早い段階のものであったらう。……

以上(A)から(N)まで、手許にあった著書から引いた。広く関連書を調査した訳ではないから確実性の乏しい事は、あらかじめお詫びした上で、以下述べるのであるが、右引用の文からでも言い得る事は、八和歌の奥義は知らず候Vという付句の出典に就いて、それを

①『吾妻鏡』のみに限定するもの。と

②『吾妻鏡』およびそれ以外の書を挙げるもの。

との二つに分類出来よう。①についてはしばらくおいて、次に②について考察を加えてみたい。②は、(C)(G)(I)などがそうで、『吾妻鏡』以外に、

『西行物語』

## 『吾妻鏡』爾來の諸書』

『巷間に流布されている(諸書)』

を挙げ、また、これを、

⑦有名な話であったとするもの。……(C)(F)(H)(L)など

⑧故事とするもの。……(C)(D)(F)(K)(M)(N)など

とに分けることもできる。併し、ニュアンスの微妙なちがいを無視すれば、『吾妻鏡』という史書が出典、『吾妻鏡』や巷間流布の諸書が出典、の有名な話もしくは故事として誰もが周知の話、ということになる。そして、これら諸説の源流が、私の見た範囲内のことではあるが、(C)の能勢説に出づる事を注意しておいてほしい。

さてそうだとすれば、次に問題となってくるのは、『吾妻鏡』は誰でも(つまり武士階級以外の)容易に見得る程の流布の書物であったのか、或いは俳諧をたしなむ階層は、日常的に見た書物であったのか、という事と、もし見られないとすれば、それに代わる巷間流布の書に、この西行と頼朝との和歌に関する話柄がほんとは出ているのか否かということになる。そして、巷間流布の書としては、右に引用した(A)から(N)までの説でみる限り、具体的書名は(C)の『西行物語』だけであり、(G)は(東鑑)爾來の諸書という、紙幅上の都合もあったとは思いますが、註記としては読者に冷淡な書きぶりしかされておらず、せめて『西行物語』以外に一つぐらいの具体的書名をあげておくのが「補註」としての親切ではなかったかと私は残念に思うのである。

『吾妻鏡』が誰でも容易に見られる書であったとする事と、この付句の出典が『吾妻鏡』のみとする事とは密接な関係があると考えられるので後で触れることにし、次に、西行物語等の巷間流布書にこの話柄が有るのか無いのか(例えば、(C)(G)(I)などは当然有るものと認めたような記述となっているが)述べてみることにする。



## (三)

西行一代に關係する里巷伝を記載する明治期以前までの作品としては、

西行上人談抄・撰集抄(広略二本)・西行物語絵詞(数種)・西行物語(写本・版本)・西行一生涯草紙・西行上人発心記・謡曲(阿漕・雨月・江口・西行西住・西行桜・実方・初瀬西行・松山天狗・遊行柳)・お伽草子(西行・小町物語)・円位上人古墳記・西行上人遠忌・鴨立沢・蔡花園奉納和歌・本朝遯史・増補山家集鈔(奥書、釈固浄筆、西行六百年遠忌執筆)・西行一代記・西行法師一代記(葛原斎作)・西行法師一代記(黒本・青本)・西行法師一代記(種彦作)・西行法師一代ものがたり・西行和歌修行(以上、順不同)

の如き作品があり、この他、多少なりとも西行に関する記載のある作品としては次の如きものを求め得る。

正伝的資料(歌集を含む)を提供する作品

台記(康治元年三月十五日)・清獬眼抄(内裏近隣炎上事)・好古日録(憲清宅)・西行書狀(高野山宝簡集所収)・吾妻鏡(文治二年八月十五日)・北條九代記(上巻)・扶桑見聞私記(第四十五)・百練抄(第六)・関秘録(巻七西行法師生没の事)・大日本史(巻二百二十五)・扶桑拾葉集(系図)・尊卑分脈・伝西行自筆詠草切・長秋詠草(下巻)・新古今集(1548 1549 1782 番歌)・拾遺愚草(下巻)・拾玉集(第五)・統古今集(1535 番歌)・玉葉集(2432 2433 2434 番歌)・御裳濯和歌集(巻一)・小倉百人一首・釈門歌仙・時代不同歌合・中古三十六人歌仙・新三十六人歌仙・新歌仙・新六歌仙・八代集秀逸・二十一代集巻頭巻軸歌・自讃歌(以上、順不同)

里巷伝的資料(歌学歌論書を含む)を提供する作品

保元物語(巻三)・長明発心集(巻六西行女子出家事)・明恵上人伝記(上巻)・後鳥羽院御口伝・八雲御抄(作法部・用意部)・今物語・東関紀行・十訓沙(下巻第八)・古今著聞集(巻二・五・十三・十九)・源平盛衰記(巻八讚岐院事)・一

遍上人語録(上卷)・十六夜日記(卷一)・とはすがたり(卷一)・沙石集(卷五上、学匠之歌好事・卷五下、哀傷之歌事・連歌事)・野守鏡・為兼卿和歌抄・歌苑連署事書(奥書)・定家卿詠方集・桐火桶・愚秘抄・徒然草(十段)・増鏡(おどろの下)・高野日記・井蛙抄(卷六)・筱舎漫筆(卷四)・梅園叢書(上卷)・清案鈔(未見、大日本史ニ所引、内容ハ文覚上人トノ話ラシイ)にぎはひ草(上下)・本朝語園(西行帰東国)・白隱和尚詠西行漢詩・草庵集類題(春)・続草庵集(雜)・三国伝記(卷六西行法師值人丸事)・今川了俊和歌所へ不審條々・了俊辯要抄・師説自見集・徹書記物語・清巖茶話・東野州聞書・兼載雜談・さゝめごと・老のくりごと・藤河記・詠歌大概幽齋抄・耳底記・水無瀬の玉藻  
 ・後陽成天皇百人一首抄・百人一首改観抄・慈元抄(卷上)・西行法師贊(艸盧龍公美述)・本朝通紀(前編)・曾呂利狂歌咄(卷三)・醒睡抄(卷八)・野ざらし紀行・風俗文選・狂文吾孀那萬俚(西行忌)・扶桑隱逸伝・鎌倉北條九代記(西行法師頼朝談話)・虚実見聞記・そしり草(西行)・百人一首一夕話(卷八西行法師の話)・扶桑故事要略(卷五・西行発心依阿漕言事)・遠碧軒随筆(下の二・下の三)・駿臺雜話(仁集鬼神の徳・信集世をすてゝ身をすてず)・松屋筆記(八十五)・安齋随筆(卷一)・櫃のしづ枝(卷下西行法師の歌)・三晝庵随筆(上、西行法師道の辺の歌の事・下、西行絵巻物の事)・玄同放言(卷一下)・北窓瑣談(卷一)・嘉良喜随筆(卷三)・燕居雜話(卷二)・隣女晤言(二、西行談抄の歌)・海録(卷三・十二・十五)・理齋随筆(卷三)・春波楼筆記・十八大通(西行庵竹の杖)・屠龍工随筆・甲子夜話(卷四十三・五十一)・退閑雜記(後編卷一)・窓のすさみ(第三)・和漢三才図会(第七十二山城)・山域名勝志(十四愛宕郡)・山州名跡志(二、愛宕郡)・雍州府志(寺院門五)・高野春秋(七)・紀伊国統風土記(高野山部五)・河内名所図会(二、石川郡)・新編武蔵国風土記稿(三十五)・新編相模国風土記稿(四十一)・近世崎人伝(四僧似雲)・笈埃随筆(卷二・三)・橘窓自語(八)・塩尻(卷七十一)・百草(卷一田島西行庵)・壬戌紀行(上)・柳亭漫筆(西行腰懸石)・類聚名物考(卷五十二)・頼輔卿口伝集・頼豪阿闍梨恠鼠伝(卷四)(以上、順不同)

等があり、右は、多分に便宜的分類にすぎないが『西行全集』(伊藤氏)にも右の大部分は引用してある。これらの

中、今問題とする、頼朝と西行が鎌倉の幕舎に於て会見し、和歌に関する会話をなし、しかも西行が和歌の奥義は知らずと答えたとする話柄を記載するものは、

西行一代里巷伝的作品中の

本朝遼史・種彦作の『西行法師一代記』

正伝的資料とした中の

吾妻鏡・扶桑見聞私記・大日本史

里巷伝的資料とした中の

扶桑隱逸伝・本朝通紀・百人一首一夕話・扶桑故事要略・鎌倉北條九代記・頼豪阿闍梨佐鼠伝

の十一作品で、前節(二)で引合に出された里巷伝記載作品としての『西行物語』には、この話柄は含まれていないのである。もっとも『西行物語』からの影響の強い『西行法師一代記(葛原斎の作)』にはこの話柄は含まれているが、ここでは「素盞烏尊の八雲立出雲八重垣の御神詠より和歌の奥義に至る迄、委しく伝へ参らすれば」と、逆に奥旨を伝受した事になってしまっている。

なお頼朝が西行を謁見し和歌弓馬の術を問うた事のみを記載し、和歌の奥義は知らずと西行が答えた事は記載していない作品は、

北条九代記・駿臺雑話・和漢三才図会・新編武藏国風土記稿

の四作品であるが、これは肝腎の和歌の奥義を知らずとの西行返答が無いのであるから、去来付句の出典とはなし難い。それ以外、さきに煩雑なまでに多く挙げた諸作品の中には、去来付句の出典と見なし得るような記事は全く見当らないのである。

そこで結局右に挙げた十一作品の中、『猿蓑』編集時(元禄四年)以前のものがその出典となるが、それに該当す

るのは、吾妻鏡と扶桑隱逸伝と本朝遼史と鎌倉北條九代記のみである。この四作品以外は、長井定宗編の『本朝通紀』は元禄十一年刊、盤察編の『扶桑故事要略』は正徳五年刊、『頼豪阿闍梨恠鼠伝』は文化五年刊、『大日本史』は文化七年から嘉永四年にかけての刊行、尾崎雅嘉の『百人一首一夕話』は天保四年刊であるからすべて後出作品である。また『扶桑見聞私記』の成立は未考であるが、作者を大江広元にみせかけた偽書と言われ、刊本はななく写本で伝わっているから、芭蕉や去来の目にも触れ難かったのではなからうか。

そこでこの付句の出典は『吾妻鏡』か、深草の元政上人著作の『扶桑隱逸伝』（寛文三年序翌年刊）か或いは林靖撰の『本朝遼史』（寛文四年刊）および『鎌倉北條九代記』（延宝三年刊）かのいずれかに落ち着くのであるが、正直のところ、私にはそのどれとも決め難いのである。元政上人は『草山和歌集』などの作もあり、隱逸伝にも、能因・西行・兼好・長明・頼阿・宗祇等々の芭蕉や去来が親しんだであろう人物の伝が多くあり、目に触れる機会もあり得たのではないかと思う。『本朝遼史』も、猿丸・喜撰・黒主・蟬丸・深養父・長明・兼好などの有名隱遁文人を多く載せている。又『鎌倉北條九代記』は『猿蓑』に一番近い時期の刊行である。一方、『吾妻鏡』も、特に去来は、その句から考えても弓馬等の軍法ばなしに関心があったようであるし、又武士的精神を表出した句も他の武士出身俳人より顕著と思われるから、鎌倉幕府の記録としての『吾妻鏡』に無関心であったとも思われない。後でその方面について少し触れることにして、右の四著がおそらく去来付句の出典とみなして略々間違いが無いのではなからうか。少なくとも、『西行物語』をあげたり、『吾妻鏡』のみで打ち切ったり、「（吾妻鏡）爾後の諸作品」というような不親切な説明よりは、少しは良心的であると信ずる。

(四)

次に、作品として文字に定着はしていないけれども、口承口碑として庶民の間に、この頼朝西行の和歌会談話柄

が広まっていたのではなからうか、という事も一応調査しておく要があるろう。そこで西行に関するどのような話柄が民間に伝承されているかを次に調べてみたい。主として郷土史料に依る。

袈裟掛の松(茨城県取手町『北相馬郡志』)

西行が文治元年当地を過ぎた時、松に袈裟を掛けて休息し、和歌を詠んだという。

笠掛の松(静岡県志太郡『志太郡志』)

当地で病没した同行の西住の墓の側にあり、西住が松に掛けた笠に「西へ行く雨夜の月やあみだ笠影を岡部の松に残して」と誌してあったのを、後に西行が見て「笠はありて身のいかにして無かるらん哀れ儂なき天が下とは」と追懐したと言う。西行物語にこの西行歌は見えており、又、山家集にも同行西住の死を追懐した歌がある。

笠掛の桜(香川県善通寺市『仲多度郡史』)

治承末年、当地近くの山里に結庵中、同行の供人が帰京の形見に、笠を桜に掛けておいたのを見た西行が「笠はありてその身はいかになりぬらん哀れ儂なき天が下かな」と詠んだと伝える。

西行見返り桜(埼玉県都幾川村『川越地方郷土研究』)

西行が慈光寺参詣の時、観音化身の小僧との問答で意味を理解できず、引返す時桜の枝を地に挿したのが見返り桜となったと云う。

西行戻しの松(宮城県松島『観迹聞老志』)

長老坂の上であり、見仏上人(撰集抄、広本巻三第一話に見ゆ)に遇って逗留した西行を戻した松。又、西行が阿漕の歌を翁に問うたが解し得ず、恥じて戻ったとも言い、翁は松島明神の化身であったと伝う。

逆うつぎ(長野県阿智村『伊那の伝説』)

西行巡国行脚中、当地の逢坂の関まで来てうつぎの木の杖をそこへ挿したのが根を下したといい、願をかければ

齒病が治ると言い伝える。

西行振松(鎌倉市片瀬『神奈川県誌』)

本蓮寺門前にあり、枝葉はすべて西を指すが、これは西行が来巡して枝をねじて西を向けたためと伝え、見返松ともいう。葛原斎の『西行法師一代記』(巻三)にもこの話柄を載せている。

夜泣石(長野県上山田町『郷土八石号』)

姨捨山に棄てられた姥が石と化し夜泣きしたので、西行に読経を依頼したところ、得度して二つに割れて血を噴いたと伝う。

西行戻石(栃木県日光市『旅伝』)

西行が日光見物に来遊した時、草刈小僧の行先を問うと、「冬はきて夏枯れ草を刈にけり」と返事したので、西行驚き日光を見ずに帰ったと伝う。

西行戻石(新潟県分水町『伝説の越後と佐渡』)

西行越後に来遊し、国士寺へ参る途中、石に腰掛けていた子供達と問答し、やりこめられてそこから戻ったと伝う。来乎橋(福島県月館町『伊達郡誌』)

建久元年、文覚上人行脚中、西行に憎まれていたので西行の追跡を心配し、橋に腰を下して「来るか」と独語したのが名の由来と伝う。『井蛙抄』などに見ゆる文覚との説話に関連ある話柄である。

朝六橋(福井市浅水二日町『南越民俗』)

西行、浅水に一泊し、翌朝六ツ時、橋上より文珠山を望見して「越に来て富士とやいはん角原の文珠が岳の雪の曙」と詠むに因んでこの名ありと伝う。『諸国里人談』に「津軽前の岩城山、形富士に違はず」という前書して「富士見てもふじとやいはむみちのくの岩城の山の雪のあけぼの」とあるのは類似歌。朝六橋での歌は、朝日古

典全書『山家集』の「存疑・誤伝西行和歌」には勿論採首されていない。

西行戻橋(長野県塩田市『信濃奇勝録』)

西行当地に巡遊し、子供に麦を示して何かと問うた所、「冬至たちの夏枯草」と回答したので、行先案じてこの橋から引き返したと伝う。

西行足洗井(長野県白馬村『北安曇郡志』)

西行が当郡神城村佐野に行脚に及んだことは撰集抄(広本卷二第四話か)に見えるが、ここを訪れた時足を洗った井戸と伝う。

西行清水(千葉県成田市『印旛郡志』)

早魃にも水涸れず、西行此処に休息して「道の辺に清水流るる柳蔭しばしはここに杖とどめけり」と詠じたと伝う。

西行清水(福井県小浜市『南越民俗』)

西行巡国行脚の時、此処をよぎりて村人に掘らしめた清水と言われ、勝負師がこの水を飲めば必敗すると伝う。

泡子の墓(滋賀県米原町『阪田郡志』)

西行に恋慕した女が、西行飲み残しの茶を飲み出産したが、後年西行が再度巡来し、これを聞いて歌を詠んだところ、生れた子が泡に変じたと伝う。今、そこに石碑ありて一联の詩を刻す。仁安三年西行筆という。

以上の如き民間伝承の説話があるのであるが、これら口碑は民間伝承の常として、樹石橋泉などの具体的存在物に密着した話柄が多く、勿論私の狭見が最大の原因ではあるうが、頼朝西行面謁の民間話柄は探し当て得なかった。或いはこの話柄は左程には流布していなかったためかも知れない。安東次男氏の「……このことばは、巷間に流布されているばかりでなく……」と述べられた論拠は、今の私にはつかめないのが何とも申し訳がない。

次に、この頼朝西行和歌会談の話柄が、「有名な逸話(第二節②ノ⑦)」「であり、或いは「故事(第二節(C)(D)(E)(K)(M)(N)」である、即ち誰もが周知の話柄であったかどうかの点についても考察しておきたい。

私はこの話柄の庶民の間に於ける有名度を知るために、江戸時代のマス・メディアとしての川柳と挿絵に注目したい。川柳は、蕉芭去来生存の元禄期前後の有名度を探る媒材としては、時代性に問題もあろうが、一面また歴史上の事件や人物を庶民の側からこれ程辛辣に擲んだものも他に無く、特に史上の有名人や権力者は片端から槍玉にあげられている事からも、有名度形成の媒材として注目する価値はあろうし、挿絵も絵巻物以来の伝統を継承するものが多いから、有益であると思う。つまり挿絵を通じて元禄期以前からのマス・メディアを知り、川柳を通じて以後のそれをうかがうことになって、両々相俟って元禄期前後の状況を把握してみようと考えるのである。まず、川柳から眺めて見よう。

○北面の武士西行と和歌

西行も野郎の時は北を向き

西行も野郎頭で一首よみ

西行も昔鍋取公家くらゐ

のりきよといへば荒くれ武士のやう

北面をすてゝ手爾波を拾ふなり

北面も風雅の道は西へ行き

武をすてゝ西へ行くのも讀と歌



武夫を辞めて百人の列に入り

折節は佐藤兵衛の時の夢

○百人一首「かこち顔なる我が涙かな」

かこち顔にてやつと言ふ月のこと

西行へかける無心のかこち顔

○西行、頼朝より銀猫拝領し門前児に与う

白猫を鼠の袖へ申請け

西行も初手は鼻づらこすつて見

西行は猫の鼻づらこすつて見

墨染の袖を白猫すきとほり

西行は鼠とらずの猫もらひ

此猫も佐藤と云ひし時ならば

この猫で俗の時なら銀ぎせる

千本もきせるの出来る猫をくれ

煙管がなんぼ出来べいなア此猫で

三味線の干挺も張る猫をくれ

ぶち殺しても金になる猫をくれ

西行がおれなら猫をぶちころし

西行が番を仕そふな御宝蔵

西行さん猫にも無垢が有やすか

その猫をくれさつせえと村子供

世をすてる外に猫まですて給ひ

和歌の一チ物みけなして猫を捨(コノ句ハ、本稿ノ主題ニ稍々関連アルカ。『柳多留』百三十七篇ニ出ル)

西行と一座して居る猫火鉢

白かねは猫こがねをば鶴へつけ

西行は白猫むすめ黒い猫

○伊勢参詣の歌「何事のおはしますかは」

西行は神前まではやらぬ筈

何事のおあしも持たず拔参り

附髪で涙こぼれる歌をよみ

○「鳴立つ沢の秋の夕暮」と撰集不入集

世をすてた目に絶景は秋のくれ

鳴は立ち鳥はとまる秋のくれ

焼鳴も食はれず円位見たばかり

立つ鳥に筆を残して一首よみ

田の鳥が沢に立つたで名歌出来

西行の歌で沢の名世にひろし

田のほとり鳥でにぐらぬ和歌の徳

冬ならば鴨立つ沢と詠むところ

鴨立つ沢で心ある歌をよみ

とりにがす鴨は撰者のとどかぬ目

立つ沢を心なき身の馬子にきゝ

鴨は物かは銭のない秋のくれ

○「風になびく富士の煙……」歌と富士見西行

北面をやめて富士をまむきに見

西行と不二を片荷にほうろくや

西行に筑波を見せる今戸焼

西行や鬼を今戸で焼いて食ひ

西行と狩人一つ店にすみ

西行は半分よんで吸ひつける

すりばちをふせて西行たばこにし

西行は休む時にも背負て居る

西行は風呂敷程は世に残し

西行は名高ひ尿を一度たれ

○「道のべの清水」の歌と遊行柳、および西行楼

西行も柳の下で水をのみ

清水かげうつる柳と桧笠

西行と遊行は春の錦なり

西行を見に遊行から船にのり

西行は廓きとの桜を見ずにゆき

西行は廓くわの花を見ぬばかり

西行もしばし休すらふ駿河町

○江口の遊女と西行

おんぎよしのやうに西行取りまかれ

西行庵に襟足の白ひ猫

西行も女郎に一度手を合はせ

西行は初会がへしの歌を取

○讚岐白峯陵

よしや君などゝ西行理詰なり

○後徳大寺実定寢殿の鳶なわ除け縄

鳶よけのなわが西行気に入らず

西行が足どめとなる家根やねの縄

○西行の辞世歌と西行忌

きさらぎのその望月に西へ行き

西行桜背負って居る月の笠

心なき身は味噌をする西行忌

西行忌腰を折るのが手向なり

西行忌頃身を捨て猫の恋

○西行と三夕歌

同じ刻限に三人さびしがり

淋しさは下の句同じように出来

三人で一人魚くふ秋の暮

苦屋より楨より鳴は人が知り

戸を立てる前三夕のはらひもの

三夕にまさるは禿とさしむかひ

三夕を詠むところのない繁昌さ

三夕の外の夕ぐれ仲の町

三夕の詠め所なき四里四方

三夕の外に淋しき鳥眼病み

三夕もしらで賑ふ民の秋

○その他

西行は大尾ねらいは菘でよみ

以上、主に『俳風柳多留』を中心として、川柳上の西行を見たのである。もとより私の見逃した句の方が多いと思うが、それでも現時点では、頼朝西行和歌会談の話柄を川柳化した作品は探しあて得なかった。或いは川柳子の目にはこの話柄は有名な逸話故事とは映らなかつたのではなからうか。

又、挿絵について眺めるに『新板絵入西行物語』（宝永二年三月刊上中下三冊本）と『絵入新刻西行法師一代記』（文政五年八月刊全部六冊本）とで共通する図柄は、

帝、憲清に朝日丸の御劍を賜る場面

憲清剃髪に関する場面

天龍川にて危難の場面

富士見西行の場面

法金剛院にて紅葉見の場面

江口の里にて遊女と歌問答の場面

西行大往生の場面

であって、頼朝西行面謁歌会談の図柄はない。ただ『西行法師一代記』の方には、

道に幕府に逢ふ場面

猫を里の童にとらする場面

があるが、一代記は、何としても時代的に下りすぎて、去来付句の出典根拠として時代を遡及し何等かの作品に結びつけることは難しい。ただ川柳等と合わせ考えると、この二つの話柄、特に猫を村の童児に与える話柄の有名度は向上していった事が窺えるのみである。西行話柄の中、どういう話柄の有名度が向上していったかの問題は、西行終焉の土地が河内国弘川寺から、東山双林寺へとすりかえられてゆく過程、歌僧西行よりも廻国修行僧西行へと重心が移ってゆく過程、これらの底流として双林寺の勢力圏のひじりの僧による西行説話の全国伝播、こういうことを見直さなくてはならないと思うが、今は触れない。

話を戻して、『西行物語絵巻』に於ても、徳川・蜂須賀本や渡辺家本の二種共、この頼朝西行和歌会談の図柄は

ない。徳川・蜂須賀本は、絵巻そのものが残欠本である由だから原本でどうであったのかは分らないけれど、おそらくは無かつたであろう。というのはこの話柄は、その中心となるべき和歌が『山家集』などの西行自作品に見出されないからである。西行絵巻類も歌僧西行と廻国修行僧西行の、いずれかに重心がある図柄に大別できると私は思うが、初期の絵巻の図柄の骨格は、山家集の和歌や詞書に基づくものが多かったと推察され、後から撰集抄や西行物語の話柄による図柄が肉付されていったのではなからうか。『十六夜日記』には天龍の渡しの西行、『とはずがたり』には西行修行絵のことと「風吹けば花の白波」の歌が出ているが、歌僧西行の像の上に修行廻国僧西行の像が重ねられていく過程がうかがえるように思う。

それにしても、ともあれ絵巻類や挿絵にもはじめのうちは頼朝西行和歌会談の図柄は見当らない事は、民間伝承口碑や川柳における傾向と異なるところはないのである。

(六)

以上第五節までで、去来付句の出典は吾妻鏡か扶桑隠逸伝か本朝遼史か鎌倉北條九代記かであり、決して西行物語の類でないこと、しかもその出典とみなされる話柄は巷間に流布したものではなく、有名なものでも無かつたことを見てきたのであるが、しからば去来はどうしてこのような話柄を知り得て何故に用いたのかということ調べてみなくてはならぬ。既に第三節で少し触れたように去来の句には、武士的気質表出句や弓馬等軍法関連句が、他俳人に比して顕著である事は注目されよう。同時に鎌倉北條九代記以外の三著はすべて漢文体で書かれている点も武家の読物らしいのである。

彼は父や兄弟が医や文の道を志した中であって、ひとり武技弓馬の術を志したのである。『随齋諧話』の「落柿先生行状」によれば、紫陽にあつて武事を講習し弓馬の故実をきわめている。即ち馬術は大坪式部大輔広秀嫡流の

福山氏、和<sup>やはら</sup>は笠原氏、劍は安部氏に学んで共に大意をさとし、軍法は甲州一流をきわめ（大坪注、去来句「あらそばの信濃の武士はまぶしかな」ノ前書ニモ「甲陽軍鑑を読む」トアリ）、八重垣の神法および玉法陣の図を伝承し、神道は橘家伝来の秘奥その他を相承したと言う。

元日や家にゆづりの太刀帯<sup>はか</sup>ン

秋風やしらきの弓に弦はらん

鎧着てつかれためさん土用干

鴨啼や弓矢を捨て十余年

筈の時よりしるし弓の竹

弓になる筈は別のそだち哉

何事ぞ花見る人の長刀

冨や劔を振ふ礪波山

千貫のつるぎ埋けり苔の露

聞まいといふか案山子の腰がたな

あらそばの信濃の武士はまぶしかな

コノ句前書ニ「甲陽軍鑑を読む」トアリ

月見せん伏見の城の捨郭

打たゝく駒のかしらや天の川

初雪や羅紗の羽織にのしめ鞞

供ぶれも折にこそよれ初桜

右句前書ニ「仮<sup>テ</sup>西行の詞<sup>ヲ</sup>難<sup>ズ</sup>頼政の詠<sup>ヲ</sup>うときも人は折にこそよれ、使は来たり馬に鞍をけ」トアリ



老武者と指やさゝれむ玉霰

手討した下から笑ふ西瓜哉

鶯もやゝ受太刀やほとゝぎす

右は、武士的気質を残す去来句であるが、大内初夫氏によれば、去来作品の世界を解明するキー・ワードは「弓と刀」であるという。(有精堂『芭蕉講座(第一巻)』所収「去来」)。まことに鋭い指摘であり、俳諧門外漢の私が長年感じていた事をズバリと言い切って下さっている。今私なりに大内氏のこの考察を少しばかり補充すれば、芭蕉・去来・西行は、ともに武士階級出身で、特に西行は藤原秀郷を祖とする武門の名門、去来も遠祖は「落柿舎去来先生事実」によれば藤原鎌足であり、肥前地方の城主であるという名門であった。共に天兒屋根命・鎌足・魚名と藤原氏の祖先より血を分つた後裔でありながら、武門を捨てて文学の道をえらんだという点に於いて大きな共通点がある。そういう去来が藤原氏以外に出でて開幕というそれまでの政治形態を一変するような事業を起した頼朝と、その武門政府の記録である吾妻鏡とに若し関心を持ったとしても、何の不思議もないのではなからうか。吾妻鏡が仮に一般人士には披見し難い書物だったとしても、既に林羅山による慶長古活字本あり、菅聊卜による寛永板本あり、その気さえあれば何等かの方法で見える機会はあり得たであろう。元禄二年の「いざ子ども」歌仙の第二十句目に半残の「首のはげたる頼朝の鶴」という句があるが、島居清先生は『和漢三才図会』の鶴の條を引いて「頼朝が鶴に金札を付けて放したという口碑による」と注されている。(『芭蕉連句全註解(第六冊)』並びに『親和国文』第十八号)。

この事は『続燕石十種(巻二)』所収の山崎美成の『疑問録』や『海録』にも出ているが、この頼朝放生会口碑は、民間にあっては相当興味のあったものと思われ、川柳では恰好の題材とされて数十句の多きが見えている。紙幅上それらの紹介はすべて割愛するが、この口碑の出典を探るために『吾妻鏡』が読まれた事は次の句が証明する。即ち

東鑑に影もない千羽鶴(柳樽九十篇)

がそれで、『吾妻鏡』に頼朝が鶴ヶ岡八幡宮で放生会をした記事は見えるが、千羽鶴の事は見えない事を言っているのである。ここに『吾妻鏡』が江戸中・後期に盛んに読まれた事がわかる。念の為、

東鑑は鎌くらの代をうつし

東鑑に曇りなきはたけ山

東鑑に源二位の死は曇り

等をあげて、右の証明を補強しておく。それ故江戸中後期に斯く読まれていたのであれば去来の時期に於ても矢張り武士階級を中心にしてよく読まれていた事とするのも、的はずれの見解と云えないのではないか。ただ本論考標題の去来付句の出典と見なされる記事は、即ち文治二年八月十五日条の記事、ことに西行が頼朝に答えた弓に関する言葉は、『俊兼記』なる記録があつて、それを『吾妻鏡』編纂に際して、採録したものであらうとする八代国治氏の見解(『吾妻鏡の研究』)を、補述しておくことにする。

最後に、川柳のみならず俳諧に於ても、西行を題材とする作品は、これまた枚挙に暇がない程多く、若干の用意もあるのであるが、紙幅の都合上到底紹介できぬので、せめて作者名だけでも羅列し、これらが、西行に関連する如何なる作品を出典とするかという考察は、別の機会をまらちたいと思う。

西行を題材とした句の作者名(順不同)

守武	宗鑑	貞徳	宗因	日能	芭蕉	素堂	鬼貫	西鶴	其角	去来	浪化	支考	許六	言水	越人	李由
荷兮	史邦	乙由	千春	胡及	恕流	也有	蘭更	白雄	素丸	遠近	几董	柳莊	壺中	子珊	程己	燕村
大魯	一茶	来紀	涼菟	桃隣	立吟	乙二	大江丸	蓼太	巢兆	南隣	種文	抱一	菊太	暁台	梅室	
器水	素禎	幽也	句空	青蘿	不白	成美	也梁	文窓	久遊	宗波	米仲	嘯山	麦水	素檠	洞々	

右作者中、当論考に関連する句少々

柳寒く弓は昔の憲清なり

其角

西行が軍法ばなし小夜ふけて

程己

右作者中、当論考に関連する文少々

○鎌倉の右大将西行上人に弓馬の道をたづね給ひし時、馬は大江の千里が月みればのうたの姿にて乗たまへと答へられければ、ほど拍子を心得たまひて即座に馬の乗かたをさと給ひけるとぞ云々(鬼貫「独語」)

○西行法師の歌は多く泪などを詠れてあはれなるさまのみ聞えけるに、任大臣のことにて公衡中將のもとへ弟子をつかはし、文を持って申候事のうちに、西行は世をのがれ身を捨てたれども、心は猶むかしにかはらず、だてくしかりけると也。おもへば弱々としたる人にはあらざりけるか。鎌倉にても右大将家に謁見の折から、詠歌は僅に卅一字をなすばかり也とて、弓馬のことを具に申候事、東鑑に委し。(米仲「鞞随筆」)

○西行上人鶴が岡参籠の砌、鎌くららのにめされて、弓馬の道たづねられしを、黒主の歌のやうにこそとまうしけるを、鎌くららのふかくうなづかせ給ひしとかや。いかなる奥儀にかなふ処やはべりけん云々(蟹殿洞々「的申集」跋)

以上、標題去来付句の出典は『吾妻鏡』と『扶桑隱逸伝』と『本朝遼史』と『鎌倉北條九代記』とに絞り得ること、そして去来と西行との出自経歴的類似とそれより見た吾妻鏡披見の可能性などを考察してみたのであるが、未だ十分意を尽した記述のできぬもどかしさを抱きつつ攔筆する。